

MfG_J_Leaflet_for_Setmaya_strolling_supplement

(C) 春日正利

摂田屋の散策エリア補足 ちょっとした「お話」

MfG_J_Leaflet_for_Setmaya_strolling の補足です。

たまたま、道、川、用水路の話になりました。

摂田屋散策の補足として整理したのですが、個々の話は摂田屋の重要な話題であります。物流網、灌漑のインフラも集積したところであったということです。太田川と三国街道の接点としての交通の要衝、中世の軍事の要衝、長岡町と、ここから数キロ南の十日町との間の商業の拠点としての摂田屋として、話題を集めていきます。

1. 摂田屋の散策エリア補足 ちょっとした「お話」
2. D、E のルートの補足説明
3. 福島江、東大新江のサイホン
4. 全国の用水について
5. 長岡城近くの三国街道
6. 付近の中世の館(城)

参考資料 三国街道(中通り)

新潟県教育委員会編、新潟県歴史の道調査報告書 第八集の「三国街道(中通り)」(1995)の記載です。

ガイドの基礎知識として、押さえておくべきポイントが書かれています。本調査報告書は、全て長岡市市立図書館に所蔵されています。

1. 摂田屋の散策エリア補足 ちょっとした「お話」

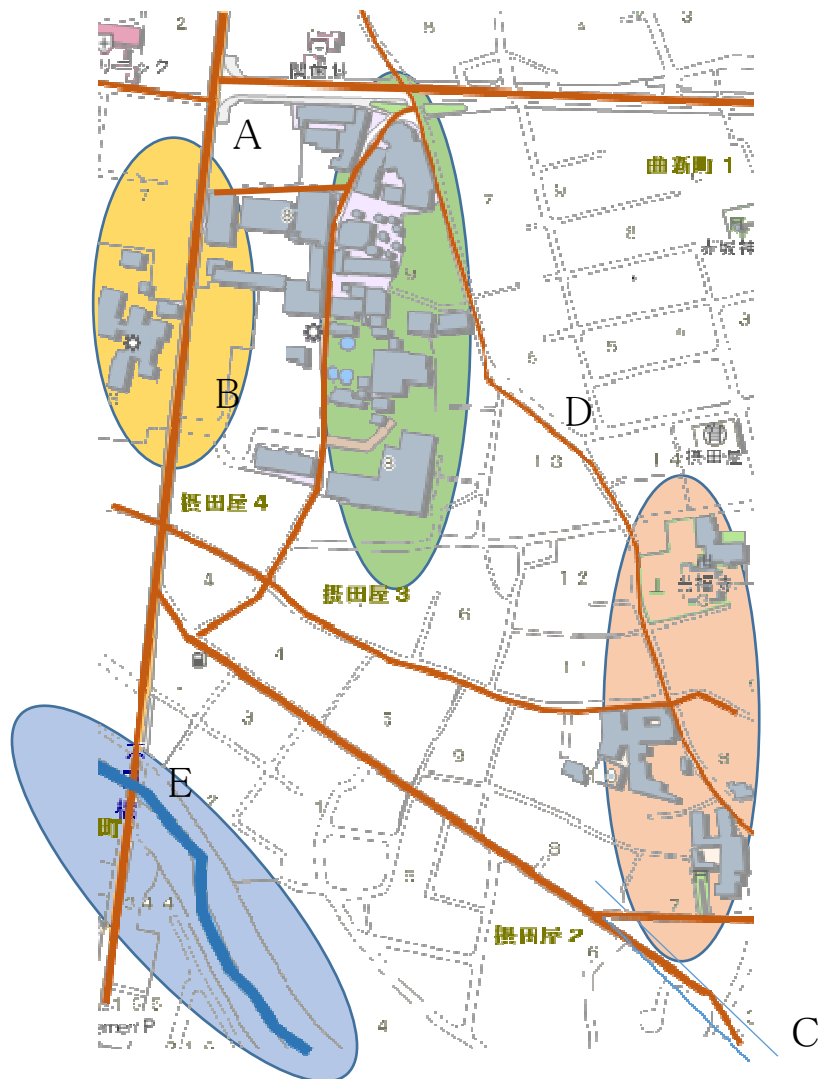
普段ご案内することのない下図の D、E のルートについての補足です。

D のルート

旧三国街道は宮内・溝橋で曲がり、農業高校正門前まで直線的に延び、そこから曲って辻地蔵まで、ほぼ直線。辻地蔵の位置は、摂田屋村の入り口。そこが旧三国街道と山道・行者の道が分岐。

E のルート

太田川の土手の散策路で、福島江サイホンの最上流の太田川サイホン。キジのつがいの生息地。サギのエサ場。大峰山と金倉山の間には太田川の上流の竹之高地が隠れている。



2. D、E のルート of 補足説明

宮内駅近く

明治40年創立・古志郡立上組農学校(現、県立長岡農業高等学校)の学校正門が、旧三国街道に面しています。

お城近くの三国街道の話については、別シートの「お城近くの三国街道」にまとめました。

宮内商店街と雁木通り。 雁木は相互扶助の精神。

長岡秋山孝ポスター美術館。

美術館は、旧長岡商業銀行宮内支店。 新設時の鉄筋構造建築の経緯と、長岡空襲延焼食い止め、摂田屋地区が火災焼失を免れた話。

ここは五十年前まで、国道十七号。

これからご案内する摂田屋の建造物の多くは明治後半から大正期。

オイルシテイ長岡の繁栄の後押しも大きかったと思います。

越のむらさき 交差点で

前の南北の道路、室町時代以前からの道で、修験道の行者も通った道。

南側は村松、山古志に通じています。

北側は、江戸時代には旧三国街道で、長岡町に至る道。

江戸時代に、ここで旧三国街道ができ、三差路になったと思われます。

ここ長岡の南部は、2004年10月の中越地震で震度6強。

震源は、一番端の山塊後方の長岡市川口で震度7。ここから15キロほど。

この地震で、ここから望める東山全体が70cm隆起したと言われています。

山古志という地名、地震で全村避難で報道をご覧になったかたもおられると思いますが、一番端の山塊の付近。ここから5キロから15キロの範囲です。

当時連日報道の、新幹線脱線停止現場は、ここから3キロほど南。

全高架橋維持・無事脱線停止は、当時のJR東日本の、阪神大震災以降の地震災害の経験をもとに、10年近くの愚直とも云える保守活動が功を奏したことをお話したいと思います。

平年の積雪の年の4月末、運がよければ、鋸山の雪形を見ることができます。

辻地蔵

古くは集落の入口や山道の分岐点に安置されたものが多く、この辻地蔵も、長岡町にいた女の子が迷子で行方不明になってしまった両親が、その子の無事を祈って、三国街道と、その脇道の山道の分岐点のこの地に建てたと言われています。右は江戸、左は山道の文字が読めます。

越のむらさきさんは、お地蔵さん建立の25年後に創業ですから、建立当時のお地蔵さんは、村の入口の辻にポツンとあったのではと思います。

吉乃川・中越酵母工業

戦後の酵母事業、戦後のパン酵母製造への参入。

現状、全国に4社、県内のパン製造に使うパン酵母は、10パーセント、ここから出荷されています。

全国の酒蔵の新酒開発の酵母の受託開発。

太田川土手

福島江の太田川サイフォン、十日町から流れてくる埃坪川の排水機場。

川上四郎さんの旧制中学時代の油絵の写生ポイント。

土手の下は、水鳥やキジのつがい、大きなサギの飛翔も見れる。

遠くから定明の八幡神社拝観。

撰田屋城の位置予測。

春先の雪どけシーズンの太田川の水量の多さは、圧倒的です。

大雨のときも、一気に増水します。

次の章で、福島江の4つのサイホンの話をします。

3. 福島江、東大新江のサイホンについて

(1) 福島江のサイホン

福島江は、妙見堤から信濃川の水を取り入れ、約20kmもの距離を流れ、現在の灌漑面積は3,500ha、三条方面を含めると 7,000haです。

その20kmの間に、太田川サイホン、柿川サイホン、栖吉川サイホン、池ノ島サイホン、計4つのサイホンがあります。この4つのサイホンで、信濃川右岸の四河川を横断し、最後に刈谷田川に合流しています。

摂田屋の太田川サイホンは、これらのサイホン施設の中で、全体像を容易に見ることができる点で、一番だと思います。他の施設は、横断河川と斜め横断しているためでしょうが、周辺構造物が大きく、地上部に出ている上流下流部分の距離があるのに対し、太田川サイホンは一目瞭然です。

1) 摂田屋の太田川サイホン

2) 金房の柿川サイホン

地蔵(東北中学近く)の栖吉川サイホン
池ノ島サイホン

3) 栖吉川サイホン

栖吉川沿いに高橋酒造があるところから150m下流。
栖吉川サイホンができる前は福島江は栖吉川へ合流し、
用水を栖吉川へ注水していました。

4) 池ノ島サイホン

栖吉川サイホンから城下橋の近くまで、ほぼ併走。
下々条で分流する。
分流のひとつは北上し、長呂の2kmほど上流で、池ノ島サイホン
により猿橋川を横断。長呂付近で消滅。
もうひとつは、東北方向で、大曲戸で刈谷田川に流れ込む。

(2) 東大新江のサイホン

村松の石坂小学校の近くで、太田川を横断している。

4. 全国の用水について

福島江、東大新江が、江戸時代に、村の庄屋が中心となって開鑿した歴史は、私らの誇りである。しかし、全国にも多くの用水が古くより開削されており、福島江、東大新江の特異性について知りたいところであり、下記のような、いくつかの見方から、調べたいと思います。

「市外から来た人から、町なか(主要道路)に橋がたくさんありますねと云われる」
 「藩主や武士階級の発案でなく、村の庄屋が中心となって開鑿してきた」

(1) 全国

全国では、三大用水として、箱根用水、玉川上水、辰巳用水。

三大疎水として、琵琶湖疎水、那須疎水、福島県の安積疎水(あさかそすい)をはじめ、多くの用水があり、新潟県内では、中江用水が著名なようである。

(2) 新潟県内では

江戸時代に高田藩首席家老小栗美作がこの中心となり、当時日本一の事業家河村瑞軒を江戸から招いて顧問とし、郡奉行長尾小右衛門を普請奉行として工事を監督させるとともに、野尻湖・苗名滝を視察し延宝2年(1674)工事に着手し、5年の歳月をかけて同6年に完成した。初期延長26km。

中江用水は、藩営事業として施工しただけでなく、その維持管理も公費。

現在で賄われていた。現在の灌漑面積 3,000ha。

それに100年ほど先行する妙高市、上越市にかかる上江用水(うわえ)は、1573年からの水路の建設もある。

県内で初めて世界かんがい施設遺産に登録。

(3) 世界かんがい施設遺産

H26遺産登録開始、最初に世界で3カ国9施設、うち国内は4施設。

▽十石堀((茨城県)

▽見沼代用水(埼玉県全域)

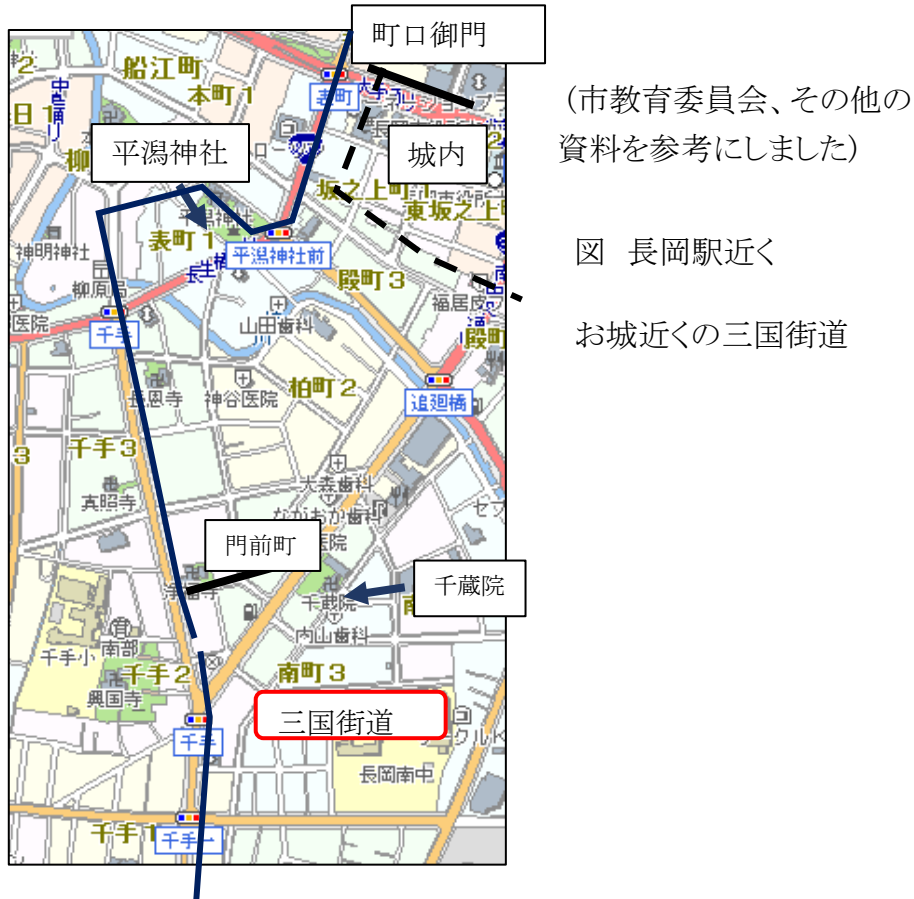
▽倉安川・百間川かんがい排水施設群)(岡山県)

▽菊池のかんがい用水群(熊本県菊池市)

H27に中江用水、県内で初めて世界かんがい施設遺産に登録、ほか。

H29現在、国内39施設。

5. 長岡城近くの三国街道



匠橋の手前、町口御門あたりから長永寺の手前

ア) 江戸時代は、三国街道と大手門からの交叉する場所であった。

～新潟湊(内川河戸経由)、三国、北國(柏崎往来経由)、新潟蒲原往来につづく結節点。三国街道は、ここから南へ、平潟神社の周りを左手に見ながら大きく曲がり、千手から現在の千歳交差点方面へ向かう。内川河戸は、下流側から順に、蔵王河戸、石内河戸、安哲河戸、重右衛門河戸、呉服町河戸、渡里町河戸、上田町河戸の七カ所内川の右岸が裏の町。(呉服町あたりの西側が裏四の町)

イ) ここから駅前、戦前はビル群で、高層化前の東京・大手町をみるが如し。この財政的な裏付けと、都市計画の先進性。

参考資料として、新潟県教育委員会編、新潟県歴史の道調査報告書第八集の「三国街道(中通り)」(1995)の記載を、テキスト化しました。ガイドの基礎知識として、押さえておくべきポイントが書かれています。

6. 付近の中世の館(城)

本章は、一部、MfG_J_Zaoh-Jinja_Shrine の中の補足、上杉謙信と長岡宮内・上条城の記述と重複しています。

(1) 上杉謙信と長岡宮内・上条城

謙信は、栃尾城から長岡宮内・上条城に移ったとき、長尾から上杉に養子として迎えられた。上条城の位置は、現在の原信・宮内店の東にあたり、栖吉城、村松城が見え、さらに栃尾城も榎峠に中継の出城を持てば、連絡を持てる位置になる。西山方面、小千谷方面も眺望が拓け、金倉山を抑えると魚沼全域にも連絡を持てる。その意味で、宮内・上条城は、重要拠点と云える。村松城と金倉山頂上を結べば、魚沼・坂戸城の上田衆との連絡も可能であったであろう。

上条城を含め、これらは、城というより大きな館が、主要な城としての栃尾城、栖吉城、坂戸城との連携出城のようなものだったと思われます。

(2) 上条城の近くの摂田屋城、定明城、鷺巣城、村松城、そして中沢城

摂田屋城	太田川の右岸、吉乃川の上組蔵の真南あたりにあったらしい。川上四郎の生家も、このあたり。
定明城	尼寺の定明寺と八幡神社の間のあたり。 星沢仁太郎の生家も、近く。
鷺巣城	鷺巣町の曹洞宗寺院の定正院の境内にあったとされる。 山上の寺の周りは、参道階段や崖に囲まれた要害である。
村松城	長岡市村松町の古刹円融寺の奥山にあったという。 背後には修験の大峰山を控え、やはり要害である。
中沢城	中沢町の奥、真宗大谷派寺院の専行寺から、中央総合病院の見える方角に少し行っところ。

参考資料 新潟県歴史の道調査報告書 第八集

三国街道(中通り) 新潟県教育委員会

(二)街道の確定

p13

千手町村と長岡城下柳原町とを分ける赤川（内川）にかかる境橋(現在の栄橋)を越えて長岡町に入る。元和四(1618)年の長岡城の図には、橋は長さ八間、横二間の板橋で、橋を渡った町の入口に高さ三間の桁型状の土居が見え、道が土居の間を鍵型に曲がって通じている。長岡の市街が整うまで近辺の総鎮守だったと伝える神明社が街道の左側にあり、幅四間半の道の両側には呉服問屋や海産物問屋などの商家が多かったという。

道は「く」の字状に曲がって裏一の町(現本町)西側にある喰い違いの四っ角に突き当たる。左の道は年貢米を収納する上蔵屋敷〔現船江町)のあった内川べりに通じている。三国街道は、この鍵型の四っ角を直行して幅六間半の裏町通り(現本町通り)を進むか、あるいは右折して、平瀨神社参道前の道

(旧同心町通り。近世は参道は北側だけに開いていた)を通過して表一之町南端の喰い違いまで出て、そこで左に曲がり、表町(旧本町)通り(現国道三五号線)を北上する。

平瀨神社は長岡築城前はJR長岡駅付近にあったが、敷地が城の建設地にかかったため現在地に移転した。昭和二十(一九四五)年八月の米軍機による長岡空襲で旧市街の八割が消失した際、神社境内内に避難した多くの長岡市民がここで焼死している。

表町通りは長岡城外堀の西側に位置し、外堀と平行して幅七間の道路が表一之町から五之町まで南北に通じ、呉服町一丁目の角に達している。表一之町には職人が多く居住していたが、二之町から四之町までは有力商人たちの商店や土蔵が軒をつらねていた。表町通りの東方にあった長岡城跡は、現在、市内随一の繁華街となり往時の面影は全くないが、長岡城本丸跡の位置に建設されたJR長岡駅から、信濃川の手大橋に向かう道路と表町通りの交差点に、城下町であった名残の桁形があり、城郭内にあたる表町通りの東方に、米百俵の故事で知られる国漢学校跡、山本記念公園があ

る。表町通り西側には、裏町通りに沿って裏一之町～四之町までの四町が、さらにその西方の内川の近くに上田町や渡里町があり、多くの寺院が集められた通称「寺町」がある。渡里町に長岡城下で最も重要な河渡があり、川船の発着や物資の積み替えで賑わう繁華街であった。長岡町で泊まる旅行者は、必ず渡里町の旅籠に宿泊することが義務付けられていた。

p14

表町通りにもどり、呉服町の交差点まで進む。江戸時代のこの地点は鍵形の三叉路になっていて、内川沿いの道を北に行けば、藩の蠟座役所脇にあったという轍座稲荷がある。街道は、交差点を右に曲がり、呉服町の通りを東に進んで、関東町の国道三五二号線の交差点を左に折れる。国道となった三国街道(神田通り)は、神田一丁目から三丁目(旧桶屋町・神田一之町・二之町・三之町・鍛冶町)の各町を真っすぐに北へと延びる。往時の道幅は五間半と記録にあるから、大幅に拡幅されている。途中、神田町一丁目の西に堀直奇が三年間、仮城として居住したと伝える曹洞宗安善寺があり、一丁目と二丁目の間の道を西に入ると、現在、お蔵稲荷社が建っている付近一带に、長岡藩北組が納めた年貢米を保管する北蔵屋敷が建てられていた。

長岡城下は鍛冶町(現神田三丁町の北端)までで終わり、国道三五一号線と八号線の交差点から北は、新町(旧新町村)となる。新町村は、正保国絵図では馬継ぎ宿になっていないが、天和年間(一六八一～八四)から伝馬宿継ぎだけを行うようになった。藩の政策で旅籠営業は許可されなかったもので、旅行者は長岡城下の渡里町まで行って宿泊しなければならなかった。

国道にかかる歩道橋を過ぎると街道は右折し、県道長岡・見附・三条線をJR信越線の高架橋の手前まで進む。右側の地藏堂前に金比羅塔の道標がある。正保国絵図には、街道はそのまま東進し、新保村から浦瀬を

経て東山丘陵に沿って見附へ通じる道筋が描かれているが、その後、この金比羅塔の道標に「左ハみつけ、三条道」と記されているように、高架橋の手前で左に折れて北上する道筋が北越後に向かう主要通路となったらしく、文政年間(一八一八～二九)の越後国絵図にもこのルートが太く記されている。

後者の道筋をとり、道標から左方の道に入り、JR北長岡駅前の道を栖吉川と福島江用水の分岐点まで進む。栖吉川にかかる改修橋を渡ると、街道はほぼ福島江用水の江筋に沿って下々条集落まで延び、福島江用水と県道押切停車場線が交差する地点に達する。三国街道の本道はここから県道を西に横断し、下々条(旧下条村)の集落から黒津町と天神町地域を北に進み、川辺町の信濃川岸から対岸の川袋町に渡り、与板―地藏堂―中島―渡部と継いで寺泊宿に至るが、下々条から渡船場までの道筋や渡河点については位置を確定に至らなかった。県北の新発田藩、村上藩、村松藩では、下々条の福島江用水と県道の交差点から、鴻巣橋のやや上流で福島江を渡って、県道七軒町・見附線を東方に進み、七軒町の猿橋川河畔の口留番所を經由して、福井村―鹿熊村(見附市)―見附町―加茂を経て、それぞれの城下に達する道を整備し、この道を三国街道と呼んで利用した。また、新発田藩はこの道の他、別道として下々条から北に向かって、現在の高見町―今町(見附市)― ……。

p15

堀直奇

堀秀政は「名人久太郎」と呼ばれた文武両道の武将。その息子秀治に仕えた堀直奇が、やがて長岡に移封される。

